



医療のための 質的・混合研究法

Day 1

東京大学GNRC

横浜市立大学客員准教授
大竹 裕子。©

講師紹介

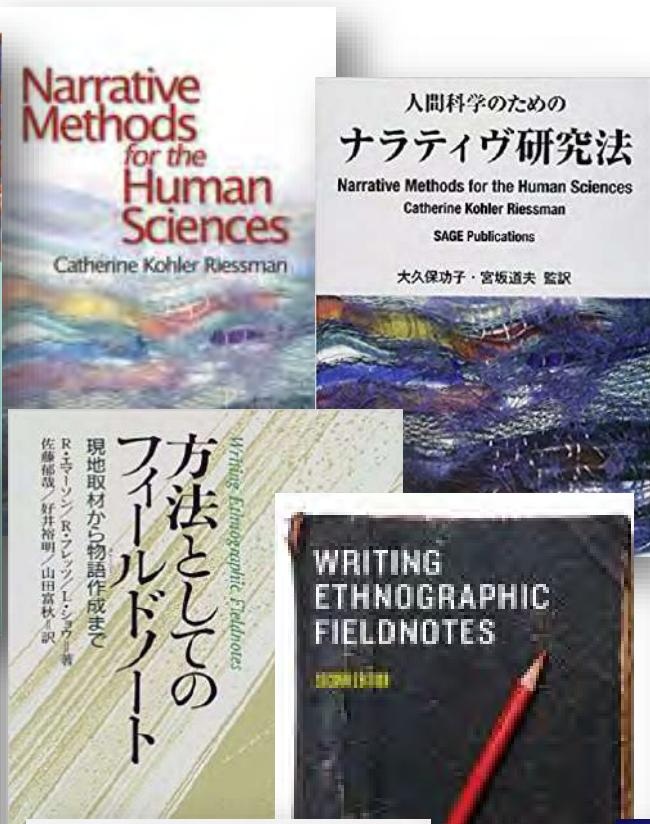
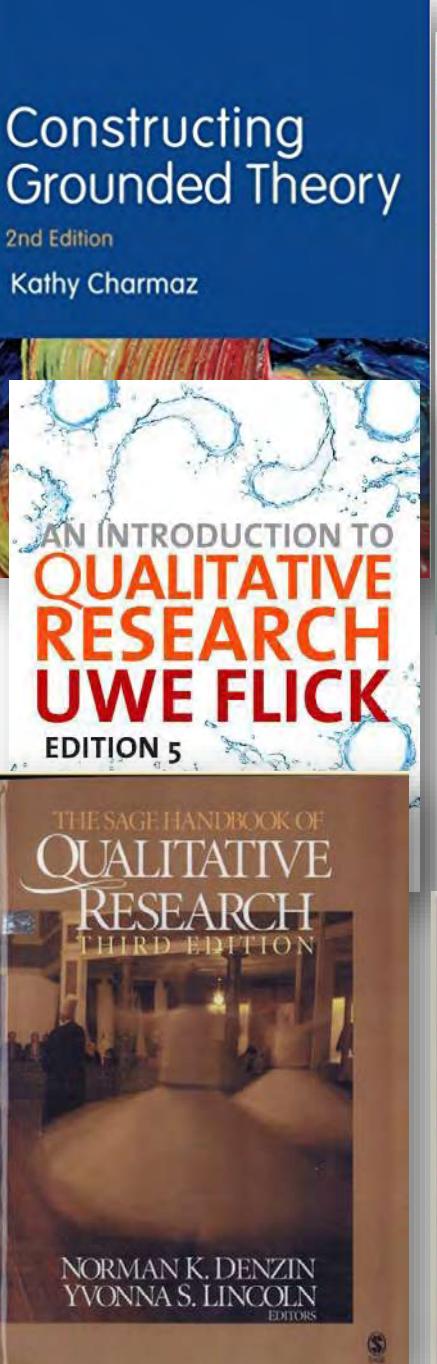
アカデミックバックグラウンド

- ・ロンドン大学衛生熱帯医学研究院(LSHTM)博士課程卒
- ・オックスフォード大学Rフェロー(学振海外特別研究員)



講義の情報源

- ・オックスフォード大学、ロンドン大学で教え(られ)ている内容 →Short Courses
- ・J. Green著『Qualitative Methods for Health Research(SAGE出版)』
- ・他、研究法の書籍・論文 →次スライド
- ・査読経験：BMJ(英国医師会)、SSM(ハーバード大学)、TransPsych(マギル大学)、他



3

ご案内

紛争地の医療人類学
生きることがなぜ、たましいの傷を癒すのか

大竹裕子

みすず書房



2023年夏ごろ出版予定
予約名簿へのご登録をお願いします！
<https://forms.gle/rZ26Rxz7s5gbWXby7>



ご案内

The screenshot shows a YouTube channel page. At the top, there's a navigation bar with the YouTube logo, a search bar, and other icons. Below the bar is a banner for a video titled '医療人類学とエスノグラフィ'. The channel profile picture is a portrait of a woman with long dark hair. The channel name is '医療人類学とエスノグラフィ', and it has 108 subscribers and 35 videos. A 'Subscribed' button with a bell icon is visible. Below the channel info, there are tabs for HOME, VIDEOS, PLAYLISTS, COMMUNITY, and CHANNEL. Under the VIDEOS tab, there are two video thumbnails. The first video is titled '著者が語る 性暴力の被害者はなぜ抵抗できないのか?' and has a duration of 23:43. The second video is titled 'もう、感激。' and has a duration of 1:07:40. Below these is another video thumbnail with the title '著者が語る あなたをモノのように扱う 性暴力 モノ化' and a duration of 15:37.

Facebook

<https://www.facebook.com/yuko.otake.739/>

Twitter

<https://twitter.com/YukoOtake4>

Youtube

<https://www.youtube.com/@YukoOtake/featured>

ベルマークを押すと
新着情報の通知が届きます。

本概論の目的

目的

- 医療現場での経験を学術知識として理論化することで、医療実践や政策に役立つ研究知見を生み出す力を養う。
- 国際的な水準で活躍できる研究能力を培う。

Key points

- 現場と理論をつなぐ方法論。
- 論理的思考に基づく「知の生産」プロセス。
- 学術だけでなく、実践や政策に寄与する「知(知見、理論)」。

本概論で学べる内容

1日目

- ・質的研究とは何で、質的研究法とは何をするための研究法なのかを理解する。
- ・質的・量的研究の違いは何で、混合法とは何を混合しているのかを理解する。

2日目

- ・質的研究の成り立ちと特徴について理解する。
- ・質的・量的研究の前提となる認識論について理解を深める。

3日目

- ・質的研究が実際に知を生産する過程を知る。

4日目

- ・質的研究の質 (rigour) および国際論文の査読ポイントについて学ぶ。

1日目に学べる内容

- ・質的研究法とは何で、何をするための研究法なのかが分かる。
- ・質的研究と量的研究の根本的な違いは、リサーチクエスチョンの立て方および認識論の違いにあることが分かる。
- ・混合研究とは、両者のリサーチクエスチョンおよび認識論を混合する手法であることが分かる。

参考文献

- ・Green & Thorogood 2018 Chapter 1, in Qualitative Methods for Health Research, SAGE.
- ・フリック 2011 質的研究入門—“人間の科学” のための方法論 春秋社
- ・鎌倉矩子 2003 質的研究の基礎 日本摂食嚥下リハビリテーション学会雑誌 7(1):12-18.
- ・箕浦(Minoura)康子 2013 フィールドワークの技法と実際 ミネルヴァ書房.
- ・松山章子 2019 健康科学分野における質的研究への招待 医学教育 50(4):347～356.

質的研究とは？

事例1) 慢性疾患を有しながら独居生活を送っている男性高齢者の老いの体験

拝田一真（千葉大学）千葉看会誌 27(1):103-110, 2021

慢性疾患を有しながら独居生活を送っている 男性高齢者の老いの体験

拝田一真（千葉大学大学院看護学研究科博士後期課程）
石橋みゆき（千葉大学大学院看護学研究科）
中原美穂（千葉大学医学部附属病院）
正木治恵（千葉大学大学院看護学研究科）

本研究の目的は、慢性疾患を有しながら独居生活を送っている男性高齢者の老いの体験を明らかにすることである。訪問看護を利用している60代前半から70代前半の独居男性6名に対して半構造化インタビューを行い、解釈的現象学に基づいて分析した。

研究参加者は糖尿病や脳卒中などによる失明、運動麻痺などの身体障害を有していた。分析の結果、中テーマ：【生活の困難を体験したからこそ、病気を自覚し、食生活を見直す】・【変化した体に残された力を見出し、発揮して、暮らす】・【仕事に代わる時間の使い方を見つけ、仕事をしていない自分を認める】・【生活のために他者からの支援を求め、受け入れて暮らす】・【思い通りにならない生活の中で、一貫して自分らしく暮らそうとする】と、全体テーマ：【体が変化したことによって、生活の困難を体験した一方で、病気の自覚と変化した体に内在する可能性に気づくことができ、自分の力と支援の両方を支えにして、思い通りにならない生活の中で一貫して自分らしく暮らす】が明らかになった。

研究参加者らは多様な人間関係が重要であった、生きがいとも言える一貫した“自分らしい暮らし”によって老いを肯定的に捉えていたが、ときに、病気は他者との繋がりを困難にした。つまり、訪問看護師には、“自分らしい暮らし”に関連した人間関係を捉えて老いの体験を解釈し、高齢者と地域を繋ぐ存在であることが求められるだろう。

本研究の目的は、慢性疾患を有しながら独居生活を送っている男性高齢者の老いの体験を明らかにすることである。

訪問看護を利用している60代前半から70代前半の独居男性6名に対して半構造化インタビューを行い、解釈的現象学に基づいて分析した。

研究参加者は糖尿病や脳卒中などによる失明、運動麻痺などの身体障害を有していた。分析の結果、中テーマ：【生活の困難を体験したからこそ、病気を自覚し、食生活を見直す】・【変化した体に残された力を見出し、発揮して、暮らす】・【仕事に代わる時間の使い方を見つけ、仕事をしていない自分を認める】・【生活のために他者からの支援を求め、受け入れて暮らす】・【思い通りにならない生活の中で、一貫して自分らしく暮らそうとする】と、全体テーマ：【体が変化したことによって、生活の困難を体験した一方で、病気の自覚と変化した体に内在する可能性に気づくことができ、自分の力と支援の両方を支えにして、思い通りにならない生活の中で一貫して自分らしく暮らす】が明らかになった。

研究参加者らは多様な人間関係が重要であった、生きがいとも言える一貫した“自分らしい暮らし”によって老いを肯定的に捉えていたが、ときに、病気は他者との繋がりを困難にした。つまり、訪問看護師には、“自分らしい暮らし”に関連した人間関係を捉えて老いの体験を解釈し、高齢者と地域を繋ぐ存在であることが求められるだろう。

生涯の伴侶としての苦しみ： 重度精神疾患を抱える男性の現象学的・解釈学的研究

Kasen and Bondas (Nord U. Norway) *Global Qualitative Nursing Research* 9:1-11, 2022

Suffering as a Lifelong Companion: A Phenomenological-Hermeneutic Study of Men Living With Severe Psychiatric Illness

Lidelse som livslang følgesvenn: En fenomenologisk-hermeneutisk studie av menn som lever med alvorlig psykiatrisk sykdom

Anne Kasén^{1,2} and Terese Bondas³

Abstract

Accumulation of suffering in later life due to severe psychiatric illness has received surprisingly little interest in nursing research. Suffering in daily living seems to be more demanding for men, a phenomenon still debated in the literature. This phenomenological-hermeneutic study aims at describing and interpreting the perspectives of adult men and their experiences of suffering in daily living with severe psychiatric illness, diagnosed as schizophrenia. Data were collected in dialogical conversations with four men aged between 20 and 40 years, living alone in northern Norway. The themes created from the structural understanding illuminate the participants' suffering as simultaneously struggling against the grasp of the illness and for reshaping the future. The theoretical interpretation unfolds the multidimensionality of their suffering and the need for confirmation of the suffering and reconciliation with the losses from illness, thus making reorientation to the future possible.

Global Qualitative Nursing Research
Volume 9: 1-11
© The Author(s) 2022
Article reuse guidelines:
sagepub.com/journalsPermissions.nav
DOI: 10.1177/2333936211073616
journals.sagepub.com/home/gqn
©SAGE

重度精神疾患による苦しみが人生後半に蓄積されていくという現象は、看護研究において驚くほど関心が低い。日常生活の苦しみは男性にとってより辛いものだが、先行文献ではまだ十分に議論されていない。

この**現象学的・解釈学的研究**は、統合失調症と診断された重度精神疾患をもつ成人男性について、彼らの視点と日常生活の**苦しみの体験**を記述し、解釈することを目的としている。

データは、ノルウェー北部で一人暮らしをする20歳～40歳の男性**4名**との**対話をつうじて収集**された。

構造的な分析によってテーマを創出し、彼らの苦しみとは、病気によって自己の侵襲を受けながらも、**未来をもう一度形づくろうとする**、**そのような葛藤**であることを明らかにした。また理論的な解釈により、次のことも明らかになった。即ち、彼らの苦しみは多次元的なものであり、苦しみへの理解を求めながら、病気による喪失と和解したいというニーズがある。こうしたニーズがある**からこそ**、未来へと向かっていくことができるるのである。

苦痛と癒しの体験における社会性と時間性： 北部ルワンダにおけるエスノグラフィ調査

Otake and Tamming (U Oxford) *Transcultural Psychiatry* 1-15, 2020

Article

Sociality and temporality in local experiences of distress and healing: Ethnographic research in northern Rwanda

Yuko Otake¹ and Teisi Tamming²

Abstract

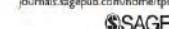
Prior studies have traced sociality and temporality as significant features of African healing. However, association between the two has not been explicitly investigated. This paper explores how sociality and temporality are associated in local experiences of distress and healing among northern Rwandans. The ethnographic research, including in-depth interviews, focus-group discussions and participant observation, was conducted in 2015–2016, with 43 participants from the Musanze district who have suffered from not only the genocide but also post-genocide massacres. Findings identified common local idioms of distress: *ibikomere* (wounded feelings), *ihungabana* (mental disturbances), *ihahamuka* (trauma), and *kurwara mu mutwe* (illness of the head, severe mental illness). One stage of distress was perceived to develop into another, slightly more serious than the previous. Social isolation played a significant role in the development as it activated 'remembering' and 'thinking too much' about the past and worsened symptoms. Subsequently, healing was experienced through social reconnection and a shift of time orientation from the past to the future; the healing experience traced a process of leaving the past behind, moving forwards and creating a future through community involvement. The experiences of distress and healing in this population were explained by two axes, i.e. sociality (isolation – reconnection) and temporality (past – future), which are associated with each other. Given the sociality-temporality association in African post-war healing, the study highlights that assistant programmes that facilitate social practice and future creation can be therapeutic and be an alternative for people who cannot benefit from talking-based and trauma-focused approaches.

Keywords

global mental health, healing, hope, local idioms of distress, Rwanda, war and conflict

transcultural
psychiatry

Transcultural Psychiatry
0(0) 1–15
© The Author(s) 2020
Article reuse guidelines:
sagepub.com/journals/permissions
DOI: 10.1177/1363461520949670
journals.sagepub.com/home/tpp



先行研究では、社会性と時間性がアフリカにおける癒しの重要な特徴であるとされてきた。しかし、両者の関連性はこれまで明らかにされてこなかった。本稿では、ジェノサイド後における苦痛と癒しの体験において、社会性と時間性がどのように関連し合っているのかを探る。

ムサンゼ郡住民43名を対象に、インデプス・インタビュー、フォーカスグループ・ディスカッション、参与観察を含むエスノグラフィ調査を2015–2016年に実施した。

結果、主な苦痛の在地表現として、*ibikomere*(心の傷)、*ihungabana*(精神的混乱)、*ihahamuka*(トラウマ)、*kurwara mu mutwe*(頭の病気、重篤な精神疾患)を特定した。住民たちの認識では、苦痛とは次第に進行していくものであり、その進行は、社会的孤立により介在されていた。孤立することで、過去の想起と考え過ぎが活性化され、症状が悪化するためである。一方、社会的つながりを回復するに従い、時間が過去から未来へと向かうようになり、癒しにつながっていた。

総じて、苦痛と癒しは、社会性(孤立–つながり)と時間性(過去–未来)という、相互に関連する2軸によって説明された。この2軸の関連を鑑みれば、社会的つながりを促進しながら未来を創造していくような心理社会的プログラムは、紛争地において有用であり、お話し療法やトラウマ焦点化療法の恩恵を受けられない人々にとって代替となり得ることが示唆された。

質的研究がやろうとしていること

Question:

- 事例 1, 2 には共通して見られるが、事例 3 には見られない要素は何だろうか？
逆に、
- 事例 3 には見られるが、事例 1, 2 には見られない要素は何だろうか？

事例 1, 2 . . . 現象学的・解釈学的研究。

事例 3 . . . 現象学的・解釈学的研究と社会構築主義を折衷した研究。

バングラデシュSylhet郡における新生児期の脆弱性と保護に関する在地の理解

Winch, P. et al. (Johns Hopkins School PH), Lancet 2005; 366: 478–85

Local understandings of vulnerability and protection during the neonatal period in Sylhet district, Bangladesh: a qualitative study

Peter J Winch, M Ashraful Alam, Afsana Akther, Dilara Afroz, Nabeel Ashraf Ali, Amy A Ellis, Abdullah H Baqui, Gary L Darmstadt, Shams El Arifeen, M Habibur Rahman Seraji, and the Bangladesh PROJAHNMO Study Group

Summary

Background Understanding of local knowledge and practices relating to the newborn period, as locally defined, is needed in the development of interventions to reduce neonatal mortality. We describe the organisation of the neonatal period in Sylhet District, Bangladesh, the perceived threats to the well-being of neonates, and the ways in which families seek to protect them.

Methods We did 39 in-depth, unstructured, qualitative interviews with mothers, fathers, and grandmothers of neonates, and traditional birth attendants. Data on neonatal knowledge and practices were also obtained from a household survey of 6050 women who had recently given birth.

Findings Interviewees defined the neonatal period as the first 40 days of life (*chollish din*). Confinement of the mother and baby is most strongly observed before the *noai* ceremony on day 7 or 9, and involves restriction of movement outside the home, sleeping where the birth took place rather than in the mother's bedroom, and sleeping on a mat on the floor. Newborns are seen as vulnerable to cold air, cold food or drinks (either directly or indirectly through the mother), and to malevolent spirits or evil eye. Bathing, skin care, confinement, and dietary practices all aim to reduce exposure to cold, but some of these practices might increase the risk of hypothermia.

Interpretation Although fatalism and cultural acceptance of high mortality have been cited as reasons for high levels of neonatal mortality, Sylheti families seek to protect newborns in several ways. These actions reflect a set of assumptions about the newborn period that differ from those of neonatal health specialists, and have implications for the design of interventions for neonatal care.

背景：新生児死亡率を減少させるための介入を開発するには、新生児期に関する在地の知識と実践を理解することが必要である。我々は、バングラデシュSylhet郡において新生児期というものがどう成り立っているのか、新生児のウェルビーイングに対する脅威がどう認識されているか、および家族が新生児をどのように守ろうとしているかを記述する。

方法：新生児の父母、祖母、伝統産婆を対象に、39 件の質的/非構造的/インデプス・インタビューを行った。最近出産した女性6050人を対象にした世帯調査からも、新生児期に関する知識と実践に関するデータを得た。

結果 インタビュイーは、新生児期を生後40日間(*chollish din*)と定義していた。母子の隔離は7日目または9日目のノアイの儀式の前に最も顕著に観察され、外出制限や、出産場所で寝ること、床にマットを敷いて寝ることなどが含まれる。**新生児は、冷たい空気、冷たい飲食物、悪霊や邪視に脆弱**だと見られている。冷たいものに晒されないようにするために、入浴、スキンケア、隔離、食事が実践される。だが、こうした実践の中には、低体温症のリスクを高める可能性のあるものもある。

解釈 新生児死亡率が高いのは、死の運命論や文化的受容のためだと指摘されてきたが、実際には、家族は新生児を様々な方法によって保護しようとしている。これらの行動は、新生児医療の専門家とは異なる、新生児期に関する彼らの考え方を反映したものであり、新生児ケアの介入をデザインする上で示唆を与えるものだといえる。

bangladesh Sylhet 郡における新生児期の脆弱性と保護に関する在地の理解

Lancet 2005; 366: 478–85 Winch, P. et al. (Johns Hopkins School PH)

Local understandings of vulnerability and protection during the neonatal period in Sylhet district, Bangladesh: a qualitative study

	Frequency (row %)*		n	Odds ratio† (95% CI)
	Kitchen	Bedroom or other room		
Subdistrict (Upazila)				
Beanibazar (closest to urban centre)	141 (8%)	1722 (92%)	1863	1·00
Zakiganj (somewhat inaccessible)	240 (11%)	2029 (89%)	2269	1·45 (1·16-1·81)
Kanaighat (most inaccessible)	394 (29%)	984 (71%)	1378	4·89 (3·59-6·66)
Maternal education				
No education	479 (17%)	2270 (83%)	2749	1·00
Primary	212 (14%)	1308 (86%)	1520	0·77 (0·66-0·90)
Secondary or greater	84 (7%)	1157 (93%)	1241	0·35 (0·24-0·49)
Wealth quintile				
Lowest	248 (22%)	899 (79%)	1147	1·00
Second	204 (18%)	950 (82%)	1154	0·78 (0·66-0·94)
Middle	144 (13%)	930 (87%)	1074	0·56 (0·46-0·68)
Fourth	128 (12%)	947 (88%)	1075	0·49 (0·29-0·82)
Highest	50 (5%)	1009 (95%)	1059	0·18 (0·11-0·28)
Birth order				
0-1	122 (12%)	937 (88%)	1059	1·00
2-3	245 (13%)	1617 (87%)	1862	1·17 (0·89-1·53)
4-5	220 (16%)	1138 (84%)	1358	1·49 (1·14-1·94)
≥6	187 (15%)	1042 (85%)	1230	1·38 (1·10-1·74)
Total	775 (14%)	4735 (86%)	5510	

*Frequencies and row percentages are weighted. †Corrected for intraclass correlation.

Table 2: Room where newborn stays during first month of life

practice prevents other household members, particularly men, from becoming polluted themselves, and restricts the pollution to one peripheral area of the house. Women are forbidden from other activities during this period of ritual pollution, such as prayer (*namaj*) and sexual intercourse.

"I am staying in this room because I delivered the baby 11 days ago, and still I am *opobitro* [polluted]. My mother-in-law will not allow me to go to the main house now. Maybe I'll start staying in the main sleeping area after two weeks" (mother of newborn baby).

The proportions of mothers and babies confined to the kitchen (table 2) or sleeping on thin mats on the floor (table 3) are important for two reasons. First, sleeping in an outside kitchen or on the ground could place a newborn at great risk for hypothermia. Second, these practices might indicate the degree to which families consider childbirth pollution to be a serious threat, and follow a traditional approach to neonatal care. Tables 2 and 3 show that both practices were significantly associated with residence in the most remote and traditional of the three sub-districts included in the study (Kanaighat), low levels of maternal education, and low wealth quintiles.

質的研究とは？

質的研究とは、

探索的なリサーチクエスチョン(Whatどんな・Howどのように・Whyなぜ)によって、現象を理解することを目的とする研究。

(p8, Green & Thorogood 2018)

質的研究法とは、

探索的なリサーチクエスチョンに応えるための研究方法。

医療分野の質的研究でよく扱われる問い合わせ

What どんな…？(要素・構造)

- ・ある人々が、ある事象について、どんな認識をもち、どんな体験をしているのか？
- ・ある人々が、ある事象について、どんなニーズをもち、どんな障壁のためにそのニーズが満たされないのか？
- ・ある事象が、どんな文化的・社会的文脈のなかで起こっているのか？

How どのように…？(プロセス・仕組み)

- ・ある事象が、どのようなプロセスで起こっているのか？(病いや治癒、援助希求の過程を研究者視点で理解する)
- ・ある事象が、どのようなプロセスで体験されているのか？(病いや治癒、援助希求の過程を当事者視点で理解する)

Why なぜ…？(背後にある理由・意味づけ)

- ・なぜ、ある事象が起こるのか？(病いや治癒の仕組みを研究者視点で理解する)
- ・なぜ、ある事象が起こると、その人たちは理解しているのか？(病いや治癒の仕組みを当事者視点で理解する)

こうした問い合わせから導かれる研究結果をもとに

- ・概念(コンセプト)を提唱する
- ・理論を提唱する
- ・尺度を開発する
- ・介入プログラムを開発する
- ・政策提言をする
- ・社会に向けた提言をする
- ・不公正を是正する
- ・学術的な課題を解く
- ・人類の叡智、思想哲学に寄与する

質的研究で扱われる問い合わせの例

問い合わせの範囲	目的
<p>ミクロレベル(個人)</p> <ul style="list-style-type: none">人々は「コロナ」をどのようなものだと認識しているか？人々のコロナ感染予防行動について、何が障壁となっているか？コロナのスティグマ化は、感染予防行動にどのような影響をもたらすか？コロナに感染した人は、社会からのスティグマをどのように経験したか？	個人のもつ認識、体験、行動、役割、アイデンティティなど
<p>メソレベル(社会集団)</p> <ul style="list-style-type: none">「コロナ」の意味は、医師とそうでない人ではどのように異なっているか？一般病院に来院した患者がコロナ陽性と分かったとき、そこで何が起こるか？自治体Yにおいてコロナ対策はどのように実施されたか？	組織、施設、コミュニティのもつ集団的としての認識、見解、性質、ふるまい、意思決定プロセスなど
<p>マクロレベル(社会、文化)</p> <ul style="list-style-type: none">製薬業界は、コロナ関連の世界・国家政策にどのような影響を与えていたか？ワクチンは世界/国内の健康格差をどのように再生産しているか？なぜ？パンデミックは、いかにして人々に恐怖とスティグマをもたらしてきたか？	格差問題、環境問題、国家・国際政策あるいは特定の文化・社会について、グローバルな視点から理解する

質的研究と量的研究

量的研究と質的研究:リサーチクエスチョン

量的研究

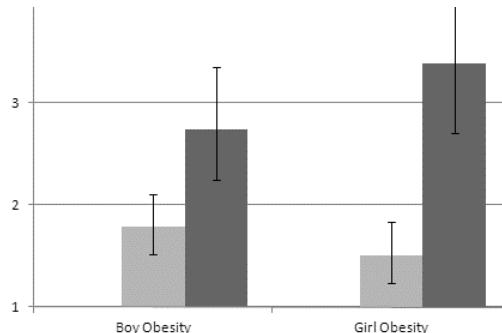
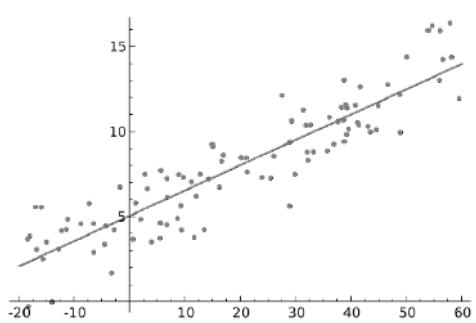
数量またはYES/NOで答えられる問い合わせをもつ研究

例)

コロナ新規感染者数は何人か？

コロナ専門医が増えれば、重傷者数は減るか？

モデルナはアストラゼネカより重傷化を抑えるか？



仮説検証

- ・計画段階で、YES/NOで答えられる仮説をもつ。
- ・実験的に仮説を検証し、YES/NOの答えを出す。

質的研究

探索的な(YES/NO型でない、5W1H型の)問い合わせをもつ研究

例)

コロナ後遺症は当事者にとってどのような体験か？

周囲の偏見はコロナ回復にどう影響を与えているか？

人々は誤情報をどのように認識しているか？



仮説生成

- ・計画段階では明確な仮説をもたない。
- ・探索的に調査を行い、仮説生成と検証を繰り返した後、何らかの理論(仮説)を提案する。

量的研究と質的研究: 方法と結果

量的研究

研究プロセス

- ・直線的: 全てのデータを同時に収集し、分析する。
- ・研究の途中で目的・方法を変えない。

主なデータ

- ・定量化できるデータがメイン。



主な結果の示し方

- ・数値
- ・表

	OR	% 95 CI		P
		Lower	Upper	
Different antibiotic treatment (cefazolin/gentamicin) (1)	0.433	0.046	4.032	0.463
Age	0.995	0.955	1.037	0.822
Sex (male) (1)	1.510	0.175	12.987	0.707
Location of injury				
Cornea-sclera (1)			0.577	
Cornea	0.726	0.167	3.144	0.670
Sclera	1.474	0.359	6.060	0.589

質的研究

研究プロセス

- ・循環的: データ生成と分析を繰り返しながら進展する。
- ・対話型: 研究を行いながら目的・方法が発展する。

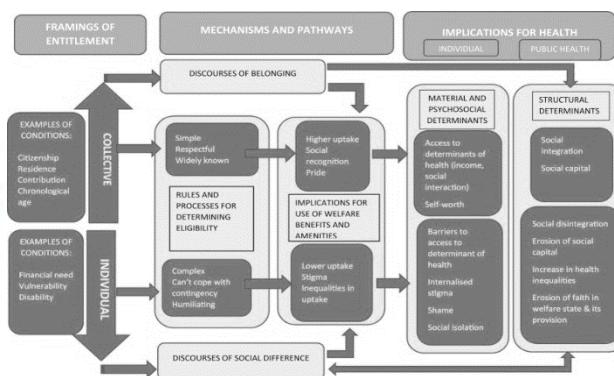
主なデータ

- ・定性的なデータがメイン。



主な結果の示し方

- ・文字、グラフィック
- ・プロセスや構造を表す図



量的研究と質的研究：認識論

何をもって「知る」とするか

量的研究

認識論 epistemology

- ・実証主義的アプローチ positivism

>>> 普遍主義 universalism

実験による検証
を経て「知る」

前提 assumptions

- ・唯一の‘正しい’現実(真理)が実在する。
- ・その法則を解明するのが自然科学の仕事である。

例)

- ・病気は、本質的にそこに実在するものであり、
病気を‘検出’して‘検証’することが可能である。
- ・診断基準は時代や地域を超える普遍的なものである。

新奇性・オリジナリティ

- ・未知の真理を見ることで、より真実に近づくことができ、人類の進歩につながる、と考える。

質的研究

(主観的)解釈
を経て「知る」

認識論 epistemology

- ・解釈学的アプローチ interpretive approaches

現象学 phenomenology、構築主義 constructionism

>>> 相対主義 relativism

前提 assumptions

- ・現実は人(主観)の数だけ存在し、人々の関わり合いによって常に形づくられ変容し続けるものである。
- ・その在り方を理解するのが人文社会科学の仕事である。

例)

- ・社会的に構築されたものとして病気を見る。様々な人々が関わり合いながら、ある状態が‘病気’という意味をもつようになる。
- ・病気の定義や意味は、時代や文化・社会により変わる。

新奇性・オリジナリティ

- ・新しい視点、ものの観方・考え方を呈示することで、それまであった常識をくつがえし、世界観を更新する、社会問題を解決する。

量的研究と質的研究:認識論

何をもって「知る」とするか

量的研究

認識論 epistemology

- ・実証主義的アプローチ positivism

>>> 普遍主義 universalism

実験による検証
を経て「知る」

質的研究

(主観的)解釈
を経て「知る」

認識論 epistemology

- ・解釈学的アプローチ interpretive approaches
- 現象学 phenomenology、構築主義 constructionism

>>> 相対主義 relativism

研究者の立ち位置 positionality についての考え方

- ・研究者は、研究対象とは独立に存在する。
- ・研究者自身の影響はデータや結果に影響しない。

研究者の立ち位置 positionality についての考え方

- ・研究者と研究対象とは関わり合っていて切り離せない。
- ・研究者も人間であり社会の一部(研究対象の一部)。

バイアスの考え方

- ・研究者の主觀性は排除する。
- ・‘正しい’現実からの歪みを修正する。

独断的な偏りを是正する方法

- ・省察: 研究過程における研究者自身の影響を絶えず分析する。
- ・批判的視座・論理的思考・議論: 立案から執筆に至るまで絶えず思考プロセスの批判的検討・反例の検討・議論を続ける。

一般化

- ・普遍的な真理があると考え、それを追求しようとする。
- ・バイアスを取り除いて得られた結果は、より真理に近く、普遍的であるのだから、一般化可能性が高いと考える。

文脈特異性と比較

- ・多様な現実を持ち寄り、共通点・相違点を探そうとする。
- ・一つひとつの研究結果は文脈特異的だが、他の文脈における研究結果と比較することで、多様性のなかにある共通点を探し、よりメタレベルの知に至る。

より深く理解したい方は…

- ・箕浦(Minoura)康子 2013 フィールドワークの技法と実際 ミネルヴァ書房.
- ・松山章子 2019 健康科学分野における質的研究への招待 医学教育 50(4):347~356.

表1 量的研究と質的研究のアプローチの基礎

	実証主義的アプローチ	解釈学的（及び現象学的）アプローチ
研究の目的	人間行動を支配している普遍的な法則を発見する。	特定の状況における人間行動にみられる規則性に関する解釈を共有する。
研究の焦点とプロセス	観察可能な行動を測ることに主な関心があり、正しく測るために条件を統制することを重視する（その最たるものは実験主義）。	「意味」を研究者と対象者がともに理解することが肝要であり、研究対象者の生活世界をそのまま与件として受け入れる。
現実の把握様式	ただ一つの現実を前提として、その現実についての法則の定立を試みる。社会的現実は誰が見ようと同様に見える「本質的なもの」としてそこに実存すると考え、その現実を自然現象を研究するように研究できるという信念を持つ。	客観的現実の存在そのものに懐疑的、人々が自分が生きている社会をどう解釈しているか（構築するか）を知ることが研究の一つの目的であるとし、社会的現実は、人々が世界に対して付与している意味によって構築されるという信念を持つ。
研究対象者をどう見るか	被験者は実験者の教示通りに動く受動的なインフォーマントとみる。	観察対象者は「意味」の共同構築者としての能動的な人間とみる。
研究者のスタンス	研究対象との間に距離を置き、相手を客観的に観察する。	研究対象のいるセッティングに身を置き（フィールドワーク）、相手に共感しながら、対象を文脈を含めて理解する。 <u>調査される側（対象者）と調査する側の関係への自省的考察を重視する。</u>

（出典：箕浦康子、2013年⁸⁾。P17~18を基に著者が表を作成し、下線部分も著者が加筆）

混合法

混合研究法 mixed methods

混合研究法とは、

一つの研究において、質的と量的の両方のアプローチを用いて、データを収集、分析し、結果を統合して、推論を導きだす研究。

参考文献

- Green & Thorogood : Chapter 1 page 17～ Where qualitative research fit?
- Chapter:4 Choosing a mixed methods design pp: 62-79 In: Designing and conducting mixed methods research Creswell, JW., Clark, VLP. SAGE Publications, 2007
- 八田太一 2019『混合研究法の基本型デザインと統合—初学者が陥りやすい落とし穴—』立命館人間科学研究, No.39, 49-59, 2019.

混合法は、質的・量的リサーチクエスチョンRQの統合

リサーチクエスチョン(八田2019)

混合型研究においては質的データと量的データの分析を行い、質と量の統合を試みる。各分析アプローチに対応するリサーチ・クエスチョンを立てる、そして混合型リサーチ・クエスチョンに手法レベルの統合を含めることで、研究手続きを明確にする。例えば、収斂デザインの場合、質と量の結果を合体させて比較考量するような混合型リサーチ・クエスチョンを立てることになる。

質的リサーチ・クエスチョン*

- ・ 現象に対し、どのように？何？を問う。
- ・ 発見する、理解する、記述する、報告するといった行動志向的な探索的動詞を用いる。

量的リサーチ・クエスチョン*

- ・ 変数を特定する。
- ・ 独立変数と従属変数の関係を説明したり、予測する理論に基づいて仮説や設問を立てる。

混合型リサーチ・クエスチョン*

- ・ 量的研究、質的研究どちらか一方では扱うことができないより複雑な問い合わせを立てる。

混合デザイン

収れんデザイン convergent design

説明的デザイン explanatory design

探索的デザイン exploratory design

埋め込みデザイン embedded design

収れんデザイン convergent design



目的

(八田2019; Creswell2007)

同じ研究テーマについて、
量的・質的リサーチクエスチョンから導かれる異なるデータを相互補完的に収集し、対象をより深く理解する。
質的研究の結果によって、量的研究の結果を強調あるいは補足する。

方法

量的研究の結果と質的研究の結果を比較対照する。または、量的結果について、
その妥当性を質的データを用いて検討したり、質的データによって拡張したりする。

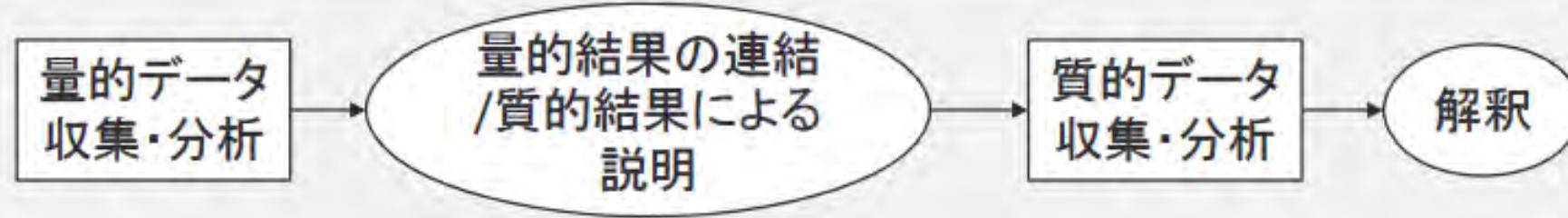
強み

質と量の両方のデータを同時期に収集し、それぞれ分析することができる。
質的研究チームと量的研究チームが独立に研究を進めることができる。

弱み

労力がかかる。質と量それぞれのパートで高度な専門性が求められる。
質的研究と量的研究の結果は互いに相いれない可能性がある。

説明的デザイン explanatory design



(八田2019; Creswell2007)

目的

先行する量的研究の結果を、後続の質的研究によってさらに説明をし、深く理解する。

方法(例)

- ・量的研究の有意な(または有意でない)結果や、外れ値、予想外の結果について、質的研究を用いてその理由(なぜ)を詳細に説明する。
- ・量的研究の結果を対象者の郡分けに用い、質的研究によって各郡を追跡調査する。
- ・量的研究の結果を、質的研究のサンプリングをする際に用いる。

強み

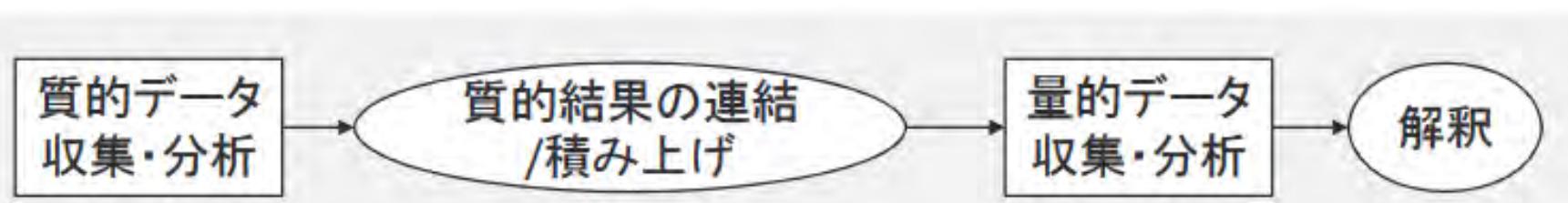
シンプルでやりやすい。一人の研究者でもできる。

弱み

時間がかかる。量的研究よりも質的研究のパートにより時間がかかる。

質的研究のパートは、対象者が量的研究のごく一部(少数)に限られる。

探索的デザイン exploratory design



(八田2019; Creswell2007)

目的

質的研究によって、全く未知の現象を探索して仮説を生成する。その後、量的研究によってその仮説を検証する。
※決まった尺度や質問紙がない、予測変数が未知である、理論的枠組みがない、といった場合に用いられる。

方法(例)

- ・質的研究によって尺度を開発し、量的研究でそれを用いてより大きな母集団について調べる。
- ・質的研究によって重要な予測変数を特定し、量的研究でそれらを検証する。
- ・質的研究によって仮説を生成し、量的研究でそれを検証し一般化する。
- ・質的研究によって現象を深く探索し、量的研究によってその現象の発生頻度(発生率等)を調べる。

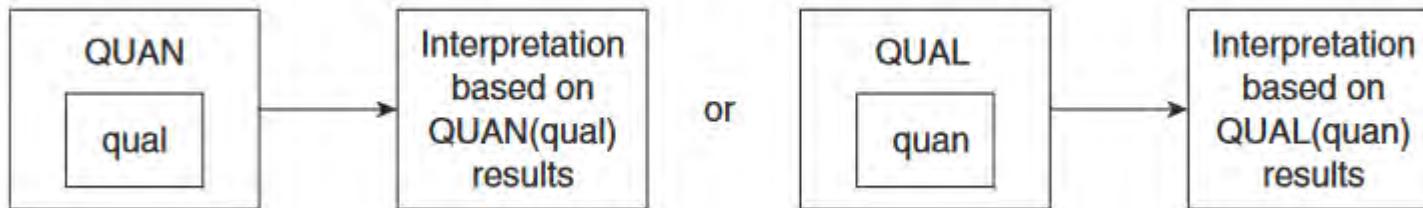
強み

シンプルで分かりやすい。説得力の高い手法。

弱み

時間がかかる。量的研究のパートは、質的研究の結果が出るまではクリアに設計しづらい可能性がある。

埋め込みデザイン embedded design



例) 介入試験に質的研究を埋め込む

例) エスノグラフィで量的データも採る

(Creswell2007)

目的 量的または質的なりサーチクエスチョンに従って、適切なデータを探る。

方法 質的研究か量的研究どちらか一方が、他方を補完する役割を担う。

例) 介入試験(量的研究)の中で質的研究を用いて、

- ①介入プログラムを開発する、②尺度開発or質問紙作成をする、
- ③介入プログラムが効くプロセスを調べる、④脱落の理由を調べる、
- ⑤介入後の様子をフォローアップする。

例) エスノグラフィの途中で、現象の発生率を知る必要が出てきた場合や、

何らかの法則性や仮説が見つかってそれを確かめたい場合などに量的研究を用いる。

強み 時間がそれほどかかりず、比較的やりやすい研究法である。

弱み 結果の解釈を統合しづらい場合がある。

1日目のまとめ

- ・質的研究とは探索的RQ(What/How/Why)によって現象を理解することを目的とする研究。質的研究法とは探索的RQに応えるための研究法。
- ・質的研究と量的研究の根本的な違いは、RQの立て方および認識論の違いにある。
- ・混合研究とは、両者のRQおよび認識論を混合する手法である。

研究法を選択する際の原則：

Research Question First, Methods later.

次回は・・・質的研究の成り立ちと特徴。質的・量的研究の前提となる認識論。



医療のための 質的・混合研究法

Day 2

東京大学GNRC

横浜市立大学客員准教授
大竹 裕子

本概論で学べる内容

1日目

- ・質的研究とは何で、質的研究法とは何をするための研究法なのかを理解する。
- ・質的・量的研究の違いは何で、混合法とは何を混合しているのかを理解する。

2日目

- ・質的・量的研究の前提となる認識論について理解を深める。
- ・質的研究の成り立ちと特徴について理解する。

3日目

- ・質的研究が実際に知を生産する過程を知る。

4日目

- ・質的研究の質 (rigour) および国際論文の査読ポイントについて学ぶ。

2日目に学べる内容

- ・質的・量的研究の前提となる認識論として、
実証主義的アプローチと解釈学的アプローチの違いが分かる。
- ・質的研究の特徴(自然主義、文脈、意味、省察、批判的視座、etc.)について分かる。
- ・質的研究が主観をどう扱っているかが分かる。

参考文献（1日目の文献&）

- ・野家啓一 2001 「実証主義」の興亡 理論と方法 16(1), 3-17.
- ・西村ユミ 2018 看護ケアと現象学的研究 日本糖尿病教育・看護学会誌 Vol.22 No.1 pp.57~60

質的研究の 学問的な基盤と成り立ち

質的研究の学問的な基盤と成り立ち

【学問の三大分野】

自然科学 natural sciences

自然を対象として扱う学問

社会科学 social sciences

社会(及び人間と社会との関係)を対象として扱う学問

人文学 humanities

人間とは何か(本性や在り方)を追求する学問

認識論

但し、近年ではより学際的になりつつある

実証主義的アプローチ

Positivism

- ・実験や測量により検証可能なものを扱う
- ・主観(意志)の範囲は扱わない

解釈学的アプローチ

Interpretive approaches

- ・実験観察には観察者の主観(意志)が常に介在していると考え
- ・主観(意志)の範囲を扱う

解釈学 Hermeneutics

現象学 Phenomenology

社会構築(構成)主義

Constructionism

量的研究が

発展してきた
学問領域

検証のための問い合わせ

- ・XとYどちらが？
- ・Xは%？

質的研究が

発展してきた
学問領域

複雑な社会・人間を扱うための問い合わせ

- ・何が What
- ・どのように How
- ・なぜ Why
- ・いつ When

成り立ち：植民地の現場を理解するために生まれた

BC600年頃

古代

ギリシャ哲学

1世紀頃～

中世

キリスト教の隆盛

14～16世紀

近代

宗教改革とルネサンス

・ギリシャ哲学の復興

17～18世紀

近代哲学 → 人文社会科学(書斎科学(山浦2021))

科学革命 → 自然科学(実験科学)

産業革命



19世紀～

大航海時代

植民地時代

・白人宣教師の日記(民族誌の原型)
エスノグラフィ



第一次世界大戦

・人類学者マリノウスキの民族誌
エスノグラフィ
『西太平洋の遠洋航海者(1992)』

→ 社会科学(野外科学)



成り立ち：より明文化された方法論へ

現代 20世紀～

第二次世界大戦

ユダヤ人迫害

- ・人類学者マリノウスキがアメリカ移民に。



戦後 1945～

アメリカ

- ・グラウンデッドセオリー法(GTA)の確立

『データ対話型理論の発見(1967)』

- ・レイニンガーが人類学博士号を取得(1966, U. W.)

『レイニンガー看護論(1991/1995)』



日本

- ・KJ法の台頭(1952～69)



研究法の前提となる
認 識 論

学問分野とその主たるアプローチ

【学問の三大分野】

自然科学 natural sciences

自然を対象として扱う学問

社会科学 social sciences

社会(及び人間と社会との関係)を対象として扱う学問

人文学 humanities

人間とは何か(本性や在り方)を追求する学問

認識論

但し、近年ではより学際的になりつつある

実証主義的アプローチ

Positivism

- ・実験や測量により検証可能なものを扱う
- ・主観(意志)の範囲は扱わない

量的研究が発展してきた学問領域

検証のための問い合わせ
・XとYどちらが?
・Xは%?

解釈学的アプローチ

Interpretive approaches

- ・実験観察には観察者の主観(意志)が常に介在していると考え
- ・主観(意志)の範囲を扱う

解釈学 Hermeneutics

現象学 Phenomenology

社会構築(構成)主義 Constructionism

質的研究が発展してきた学問領域

複雑な社会・人間を扱うための問い合わせ
・何が What
・どのように How
・なぜ Why
・いつ When

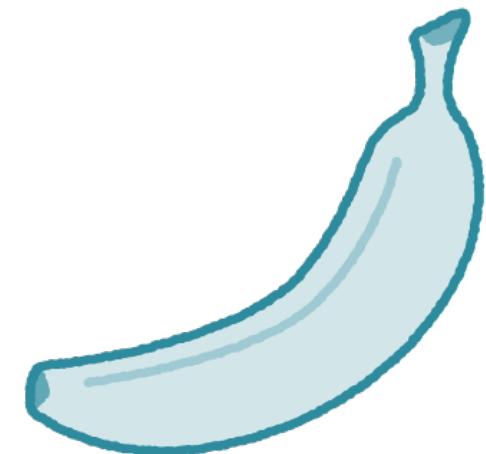
認識論 epistemology

認識論とは

- ・「知の在り方」に関する哲学の一分野。
- ・いかにして世界を「知る」か、どうすれば「知った」と言えるか、についての考え方。

認識論：

- ・実証主義アプローチ
- ・解釈学的アプローチ
 - ・現象学
 - ・社会構成(構築)主義
 - ・クリティカル・アプローチ
 - ・フェミニスト・アプローチ



どうやってバナナを知る？

実証主義 positivism

実証主義とは

測定や実験によって得られる経験的(客観的)事実のみを知識として認め、形而上学的(哲学的)な思弁や、直観などを否定する考え方。(野家2001)

成り立ち : 17世紀 科学革命

語源 : positive 実証的 > positum(ラテン語. 神により)設定されたもの
実証主義, 自然科学 = 「神の法則」を理解するためのアプローチ

世界観

- ・現実は、主観の「外」に安定して存在する(実在論 realism)
- ・現実は、誰にとっても同じように存在する(普遍主義 universalism)
- ・現実は、因果関係をたどっていくと「神の法則」に行きつく(因果論 causality)

価値観

- ・自然科学で法則を理解し技術を向上させる = 「進歩」(進歩史観の前提)
- ・十分「進歩」すれば、全学問が同じ方法で研究し、同じ結論に至る(階層構造を想定)

方法論

- ・測定可能なものを扱う(経験(客観)主義 empiricism)
- ・形而上学的な(触れない・測れない)ものは扱わない



解釈学的アプローチ interpretive approaches

解釈学的アプローチとは

人間は、自分自身の(主観的)解釈を通じてしか現実を理解できない。
故に、その「解釈」こそを研究対象とするべきだとする考え方。



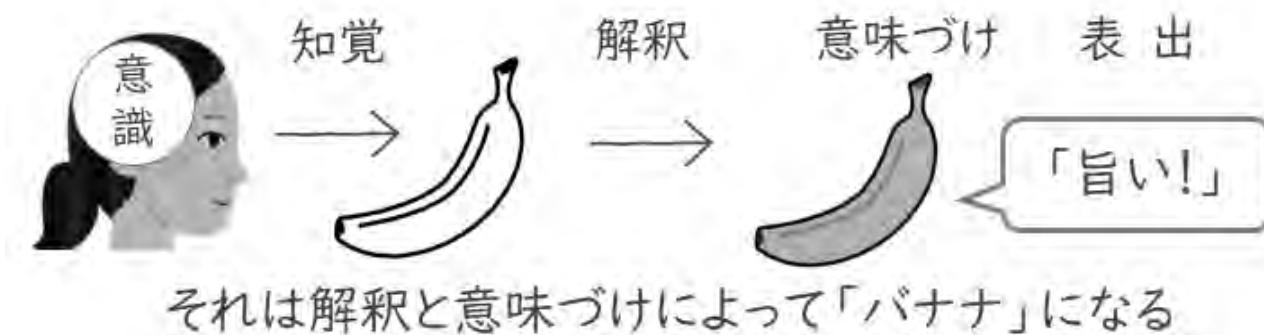
成り立ち :

18世紀 カント(解釈学・現象学ではない)

19~20世紀 ハイデガー、フッサー、メルロ・ポンティ、シュツツ

世界観

- ・「客観的である」ことを客観的には証明できない(カント)
- ・現実は、意識を通じて体験され、
知覚(認識perception)され、解釈され、意味づけmeaningされる(フッサー)
- ・現実は、人間の意識がつくり出している。
故に、一人ひとり違う(相対主義 relativism)



現象学 phenomenology

現象学とは

解釈学的アプローチの一つ。人間の意識(主観)を重視し、積極的に分析・理解する。

その人が「事象そのもの」をどう認識し、解釈し、意味づけているか。その過程を理解する。

方法論(理論的枠組み)

□ハイデガー『存在と時間(1927)』

- ・**解釈学的現象学**: その人が**事象そのものを**どう解釈し意味づけているかを理解する。

□フッサール『現象学的理念(1950)』

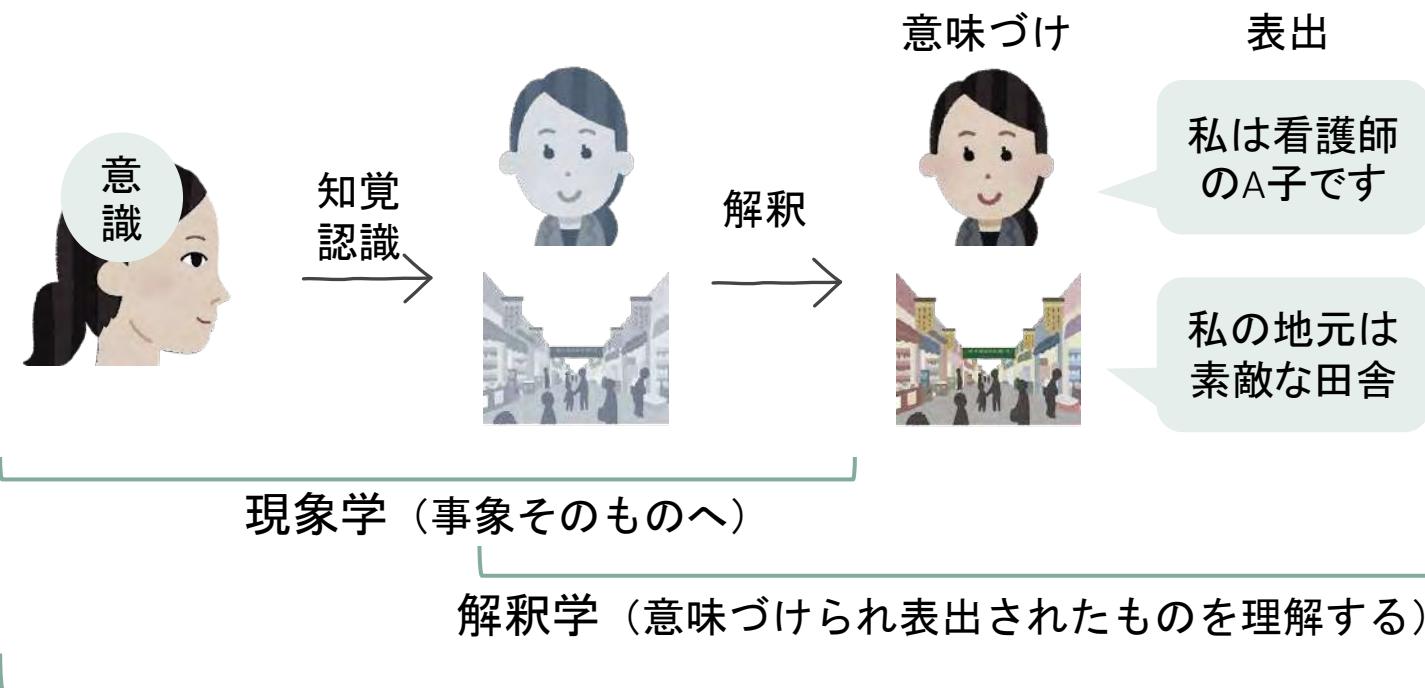
- ・**現象学的還元**: **体験**を通じて現象はあるがままに捉え、本質に迫る。
- ・**生きられた体験**、**間主觀性**。

□メルロ・ポンティ『知覚の現象学(1945)』

- ・**身体**、**間身体性**。

□シュツツ『社会学的思考の基礎(1962)』

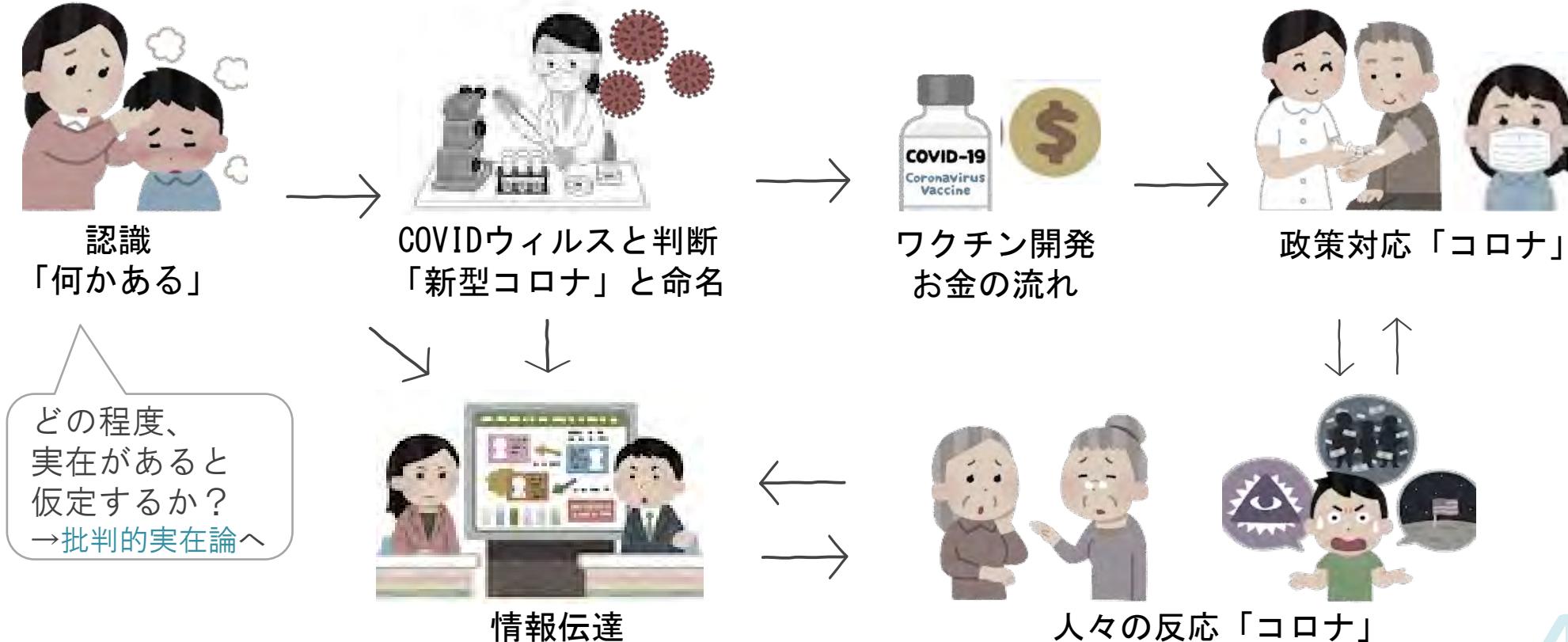
- ・**現象学的社会学**: 日常生活everyday lifeは社会の構成員によってどのように体験され形づくられているのかを理解する。



社会構成(構築)主義 constructionism

社会構成主義とは

現実は、様々なアクターの交渉によって形づくられ(構築され)ている。その過程を分析する。解釈学・現象学が発展して成立してきた。



あるウィルスに医療的意味が付与され、「コロナ」という現実(体験)が形づくられていく、社会的プロセス

その他の認識論的立場

批判的実在論 critical realism

近年の行き過ぎた社会構成主義・相対主義に対する反省から生まれた。

「実在」を認めつつ、「現実」がどう「構築されて」いるかを理解する。自然科学と社会科学の折衷。

クリティカル(批判的)アプローチ

社会構成主義の派生アプローチ。

特に、社会の権力構造や力関係によって生み出される問題に目を向ける。

研究活動を通じて、社会変革を起こすことを志向する。

フェミニスト・アプローチ

クリティカル・アプローチとフェミニズム、ジェンダー論に基盤をもつ。

知識や学術が、男性(マジョリティ)中心の社会で構築されてきたことに目を向ける。

女性(マイノリティ)視点に立った知を構築する。

方法論

社会運動や市民運動と結びついた参加型アクションリサーチの形をとることがある。

研究(者)自体も権力構造に埋め込まれた存在として、知を生産している(中立ではありえない)。

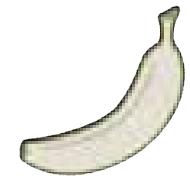
故に、自身の立場や研究の意図に自覚的でありつつ研究する(省察reflexivity)

認識論まとめ

認識論的立場の根本的な違いは、**実在の捉え方の違い。**

□ 実証主義アプローチ

・・・人の意識の介在を否定(排除)する



バナナは主観と関係なく実在する（実証主義）

□ 解釈学的アプローチ(ポスト実証主義)

・・・人の意識の介在を重視(分析)する



知覚
認識
→



解釈
→



ある事象が解釈と意味づけにより「バナナ」になる
(解釈学)

※質的研究が理解できなくなるのは・・・

実証主義の認識論で理解しようとしているから。

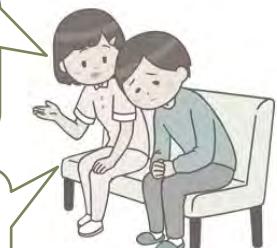
※混合法

実在の捉え方が異なるアプローチを同時に使う手法。

認識論的なパラドックスを内包してしまうことがある。

→自分の認識論的立場を予め明確化しておくとよい。

あなたの苦痛を5段階で評定して下
さい…レベル4ですね（実証主義）



どんなふうに苦しいのですか？
なぜ苦しいのですか？（解釈学）

質的研究の特徴

質的研究の特徴

Green & Thorogood p12-17, 鎌倉2003、松山2019

目的（何をやろうとしているのか）

探索的な問い合わせ (What, How, Why) に答えようとする。
人間の在り方、社会の在り方、両者の関係性について理解しようとする。
現象の複雑性と流動性を大切にし、ありのまま把握し説明しようとする。
→ 単純化や直線的説明を嫌う。

特徴（どんな共通ルールで動いているか）

- ・自然主義 naturalism
- ・文脈 context
- ・意味 meaning
- ・省察 reflexivity
- ・調査手続きの柔軟性 flexible research strategies
- ・批判的視座 critical perspectives

} 世界の観方

} 方法論

特徴1：自然主義 naturalism

自然主義とは

現象を自然な社会環境の中で観察し、分析し、理解する。

フィールドワーク、日々の暮らし everyday lifeが大事。

↔ 実験室実験。操作的手続きをとる研究



特徴2: 文脈 context の重視

自然な環境の中にある対象を理解するために、「文脈」の分析と理解が極めて重要になる。

文脈 context

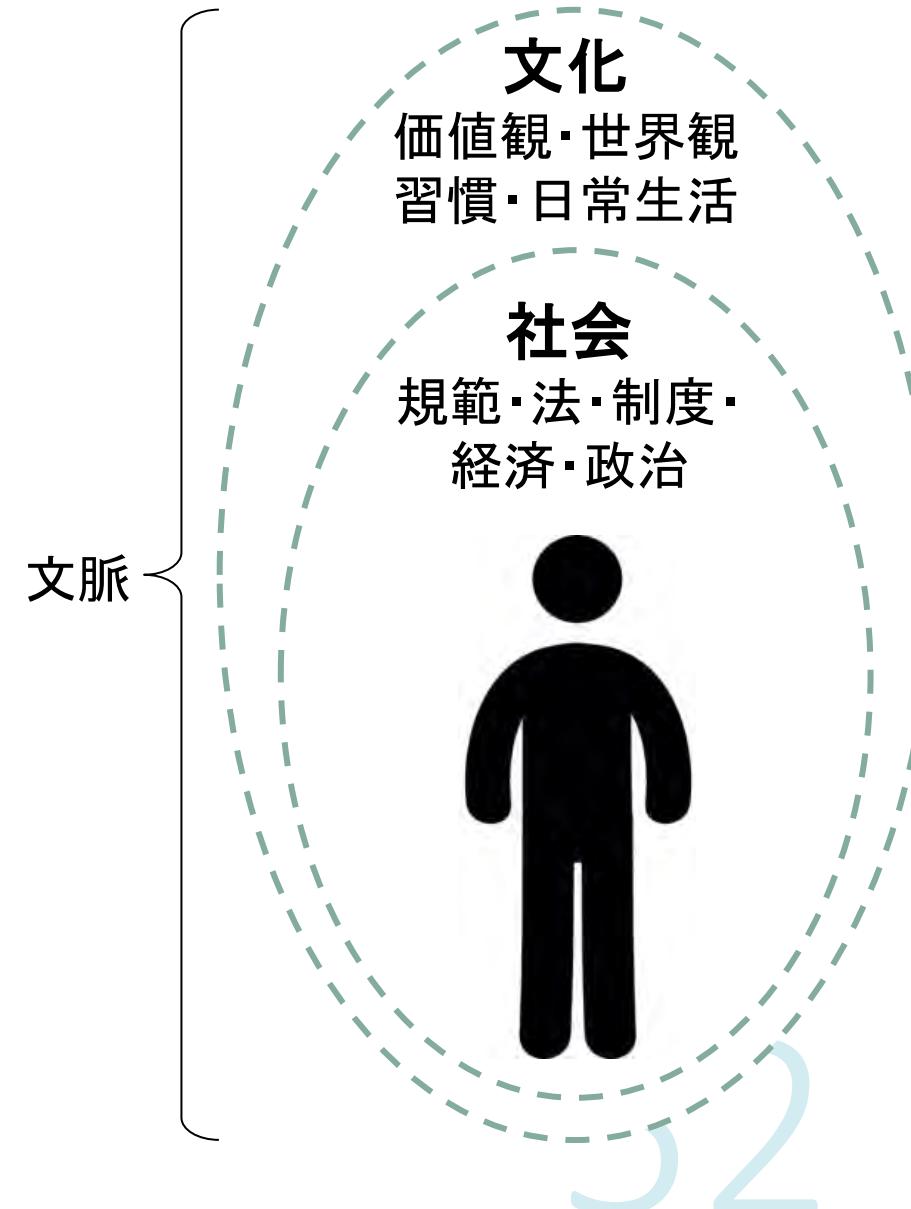
- ・対象の背景にあり、意味をつくり出す。
- ・対象のもつ意味は、文脈によって変わる。
- ・要因factorと違い、流動性と複雑性をもつ。

文化的・社会的文脈（マクロ）

- 例) 新生児を隔離する (Winch 2005)
- ・西洋の文脈…新生児虐待・人権侵害
 - ・在地の文脈…新生児を邪視から守る

個人的な文脈（マクロ）

- 例) 「足がよ、言うこと聞かねーんだよな」 (挿田2021, p107)
- ・脳梗塞後の麻痺
 - ・スナックでお酒とカラオケを楽しむことが「自分らしい暮らし」
→「好きな酒が飲めない危機」「周囲のインフォーマルな支え」



特徴3：意味 meaning への着目

意味への着目とは、

表面的な言動の奥にある（必ずしも自覚されていない）
意味、価値観、世界観を理解すること。

分析する際の問い：

- ・その人/集団/社会にとって、それはどのような意味をもつのか？
 - ・その人/集団/社会は、それをしてすることで、何をしようとしているのか？
-
- ・対象者の視点から理解する。医学的正しさを基準に見ない。
 - ・意味は重層的である。一人の人にとって・異なる人々にとって。

特徴4:省察 reflexivity

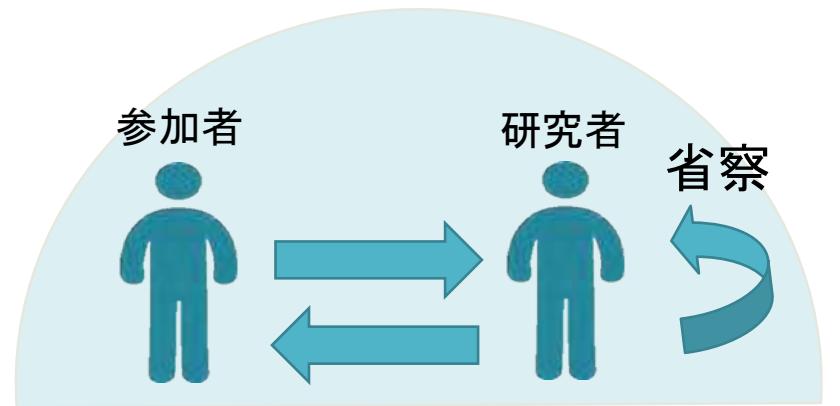
省察とは

研究者自身および研究実践そのものを研究対象の一部と見て、研究計画立案から執筆終了まで、分析を絶えずし続けること。



背後にある考え方

- ・研究は、参加者の主觀と研究者の主觀が相互に作用しながら形成されるプロセス。
- ・研究者がどんなに存在感を消したとしても、観察行為はフィールドに影響を与える。



※詳しくは3日目以降に解説。

特徴5: 批判的視座 a critical perspective

「常識(あたりまえ)」を問う姿勢

- ・先行研究に書かれていること
- ・調査で見聞きした情報・データ
- ・自分自身のしている分析

重要な問い:
本当にそう?
別の観方・考え方もあるかもしれない。
何が前提となってそれを作り上げているか?

医学・医療に関する常識も問う

例) 医学的に正しい治療(EBM)が、誰にとっても常に善であるとは限らない。
患者中心の医療が、誰にとっても常に善であるとも限らない。

※自分自身で筋道を立てて考える。権威や文献は論理的正しさの根拠にならない。

特徴5(補足): 論理的推論と議論

「分析する」とは、論理的推論を(できる限り正確に)するということ

- ・帰納法(具体例から理論を導く)、演繹法(理論をもとに具体例を分析する)
- ・弁証法(正→反→合)

間違いはいつ起きるか？

- ・帰納と演繹…そもそもの前提が間違っていると、後続の推論も間違う
自分の思考が何らかの前提(あたりまえ、思い込み)をもっていることに自覚的でない
- ・弁証法…反例を十分に検討していないとき
自分にとって無知/不知の領域があることに自覚的でない

どう対処するか？

- ・思考の前提を常に問い合わせ直す(批判的視座)
- ・反例を積極的に探す
- ・色々な人たちと議論をする

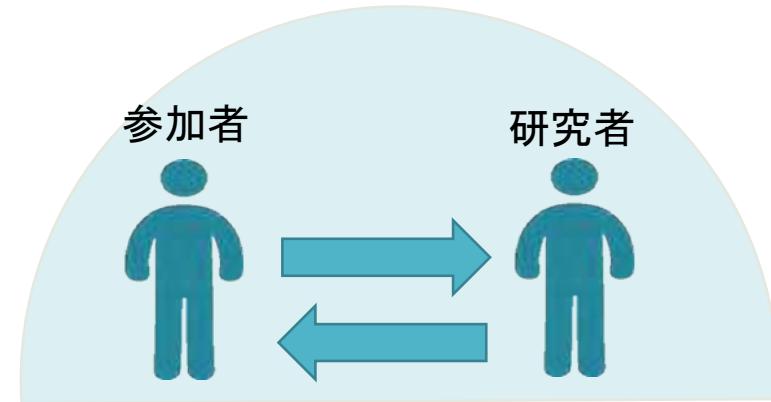
結論は常に暫定的で発展の余地がある(絶対に正しい答えはない)

特徴6:調査手続きの柔軟性 flexible research strategies

質的研究の研究プロセス

- ・循環的：データ生成と分析を繰り返しながら進展する。
- ・対話型：調査を行いながら目的・方法が発展する。

フィールド、参加者、データとの対話を通して、
研究そのものが形づくられていく。



質的研究とは

探索的なリサーチクエスチョン(what, how, why, etc.)により、現象を理解することを目的とする研究。

目的（何をやろうとしているのか）

人間や社会の在り方、両者の関係性について理解しようとする。
現象の複雑性と流動性を大切にし、ありのまま把握し説明しようとする。

特徴（どんな共通ルールで動いているか）

自然主義、文脈の重視、意味への着目、省察、批判的視座・論理的推論、柔軟な調査手続き

認識論（何をして「知った」とするか）

解釈学的アプローチ(主観的解釈を通じた理解)により対象を知ろうとする。

- ・因果関係/真の原因の追求は主な目的ではない（→疫学デザインの方が向いている）
- ・疫学では交絡要因として取り除かれるものが、質的研究では文脈として分析対象になる

2日目のまとめ

- ・質的研究の特徴は、自然主義、文脈と意味の重視、批判的視座と論理的推論による分析、省察と柔軟な調査手続きである。
- ・量的研究の認識論である実証主義的アプローチは主観の介在を否定し排除する。
- ・量的研究の認識論である解釈学的アプローチは主観の介在を重視し分析する。
- ・質的研究は、主観をもつ研究者が、研究参加者の主観的世界を理解しようとする方法。主観と主観の関わり合いのなかで適切に分析を進める手法として、論理的推論、批判的視座、反例の検証、そして省察がある。

次回は・・・実際の研究プロセスについて学びます。